様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：１８００１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2022
課題番号：１６Ｋ０２８４７

研究課題名（和文）Active Learning Based Teaching and an Assessment Tool in an EFL Context

研究課題名（英文）Active Learning Based Teaching and an Assessment Tool in an EFL Context

研究代表者
呉屋　英樹（Goya, Hideki）

琉球大学・国際地域創造学部・准教授

研究者番号：４０６４７３４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：ALBTに関する理論的基盤の整理と周辺理論を整理し，ALBTの多様性と概念の整理を行った。続いて英語のALBTに特異な要素として教授言語である学習言語の効果や，英語のみを教授言語とする事へ懸念，学習指導要領が求める「主体的・対話的で、深い学び」の意識調査を通じ，自己点検シートに含めるべき項目を明らかにした。これらに基づき「英語のALBT自己点検シート」を作成し信頼性と妥当性を調査した。分析の結果、全体的に高い信頼性とある程度の妥当性を確認できた。その結果を元に，「英語」ALBT自己点検シートの最終版を作成し，英語教師が日々の実践で簡単に授業を自己点検できるツールを開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで，日々の英語の授業がどの程度「主体的・対話的で深い学び」であるかは縦断的な実証検証がほとんどで，教師視点の点検シートは存在せず，授業計画から教育実践そして授業内省及び授業改善の環往を日々行う英語教師にとって，簡便で即時的な点検方法は確立されていなかった。本プロジェクトを通じ開発した「英語のALBT自己点検シート」を用いることにより，普段の英語の授業の計画や授業後の内省が効率よく行え，日々の実践から新学習指導要領が求める教育理念を具現化することができ，概念と勇気的に結びついている授業形態を意識することで現代社会において必要とされる汎用的能力の育成を効果的に行うことができる。

研究成果の概要（英文）：Based on earlier investigations of the project, fundamental theories regarding Active Learning Based Teaching were scrutinized and consolidated its complexity in its applications. In order to construct essential elements of ALBT in English as foreign language (EFL), a series of studies carried out by the project have illuminated many important aspects by taking prior findings of the project into consideration such as effectiveness and concern of English as medium of instruction (EMI) in EFL lessons and the conceptual construct of ALBT in EFL and its concerns of EFL teachers. Based on the accumulated works under the project, we formulated the Self-Reflective Evaluation Tool for ALBT Lessons (SRETAL) in EFL which can allow English language instructors working at schools under the current course of study, to organize their lesson plans instantly and conveniently by implementing this self-check tool into daily lessons.

研究分野：応用言語学

キーワード：英語教育　英語のALBT　授業点検シート開発

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

英語のアクティブラーニング型授業(ALBT)に関して様々な調査の多くは「学習者が何をできるようになったか」の自己評価や，学習者データを従属変数とした縦断的分析，さらにはデータの種類や検証した言語活動，授業形態の種類や期間，分析方法は異なり，必ずしも指摘されている AL 型授業の効果を一般化することは極めて困難である。また，英語教師が自らの授業が ALBT になっているかの点検を試みようとも，上記に見られるような実証検証に基づく授業実践の内省は，多忙な教育現場において授業計画から教育実践，そして授業内省及び授業改善の環往を日々行っている英語教育実践者（英語教師）にとって実用的とは言えない。加えて，日々の授業実践が「主体的・対話的で深い学び」であるかの簡便な自己点検方法は確立されていない。

２．研究の目的

本研究は，簡便で汎用性も高く，普段の英語の授業が学修者の「主体的・対話的で深い学び」を導く ALBT であるかを教師視点で簡便に確認するためのツール（自己点検用「英語の ALBT 点検シート」）の開発を目的とした。

３．研究の方法

英語の ALBT を簡易的に自己点検するための自己点検用「英語の ALBT 点検シート」の開発を進めるため,(1)まず多くの書籍や研究論文を用いた文献調査を行い，外国語としての英語教育（EFL）における多様な ALBT のあり方について整理し，(2)学習指導要領に基づく ALBT の概念の構築と点検項目を精査するために,日本の公立学校で勤務する英語教師に対してアンケート調査を行って含まれるべき概念の下位構成項目を特定し，先行研究に基づき汎用性の高い ALBT の授業点検用評価シートを開発し,(3)授業点検シートの信頼性と妥当性を検討するため実際の英語授業を用いて授業観察者に点検シートを用いて授業を点検し,その検証結果をもとに自己点検用「英語の AL 型授業の授業点検シート」を開発した。

４．研究成果

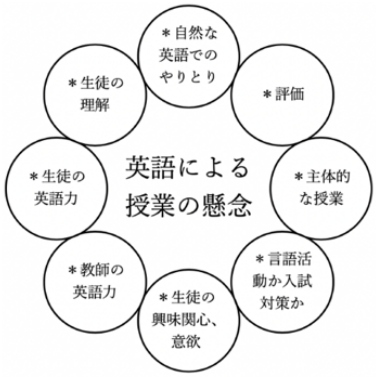
はじめに，一般的に ALBT の手法として広く注目を集めているプロジェクト型学習（PBL)(溝上，2014）について，英語の ALBT としても有効かどうかを確認した。Goya（2016a)では，プロジェクト型学習による日本人 EFL 大学生の批判的思考能力と言語能力の向上ついて調べた。参加者(n=22)は 16 週間の大学の英作文の入門講座を通じて英語母語話者と英語による議論を行い,自らで選択したトピックについて調査，発表，議論し，英文レポートとしてまとめた。調査の結果，言語能力の成長が全体的に見られ,中級レベルの学習者では上級レベルの学習者では見られない言語能力の向上が見られた。また Goya（2016b)では，同様の PBL を通じ学習者の認知的な関わり具合と第 2 言語語彙獲得，特に生産的な語彙知識の向上との関係を調査した。参加者は日本人大学生(n=22)で 16 週間の講義期間に TOEFL のライティング問題を課題として与え産出語彙量を集めた。調査の結果，学習者は習熟度が違っていても PBL を通じて同様の学習効果が認められ今後の ALBT に関わる教育的示唆が示めされた。さらに呉屋（2017）では，教員養成課程の質的再整備を目的として教育実習を終えた教員免許取得希望者(n=32)にアンケート調査を行い，課程内外での学修活動を振り返った。調査の結果,体験的学習として行った PBL は授業実践力を向上させ実習時の緊張を減少に寄与していることが分かった。一方で生徒の多様性や教育現場の理解は不十分で教職への自信低下を招いていた。学校現場や地域での活動を通じ，更

なる生徒理解や教職理解，自己効力感の向上を促す必要性が示唆された。以上のように一般的な ALBT は，言語教育および専門教育でも教育的効果が高いことがわかった。

続いて自己点検用「英語の ALBT 点検シート」の項目として教授言語に関わる項目を導入すべきかを検討するために，英語の授業において「学修言語」を「教授言語」とする場合の効果について検討した。Goya (2018)では日本の大学で学ぶ日本人英語学習者(n=10)を参加者とし，彼らが EMI 型授業の期間中に取り組んだライティング課題を学習者コーパスとしてまとめ，それを元に語彙指標の量的分析を行った。調査の結果，K1 レベルの高頻出語彙の使用と文の産出数も増加したが，低頻出語彙の使用の割合は減少した。EMI による英語の授業は流暢な語彙使用に寄与するが，その複雑さについてはあまり効果がみられない可能性が示唆された。さらに Goya (2021)では，EMI 環境での日本人英語学習者(n=27)の単語連鎖の使用と変化について調査した。調査は独自の学習者コーパスを構築し，コンコーダンサーを用いて語彙の分布と頻度，様々な種類の単語連鎖を抽出した。分析の結果，参加者は高頻出語彙を多用するようになり，2 語の単語連鎖の使用が増加し，その他の単語連鎖の使用は減少した。これにより EMI 環境の EFL では産出的スキル向上への効果は限定的であるが，定型表現能力は向上する可能性を示した。同様に Goya (2021)において日本人英語学習者(n=26)は熟達度の高い群と低い群とも短い単語連鎖の使用割合が増え，長い単語連鎖の使用割合が減少することが分かった。また低い群では２語連鎖の種類が増えたが，高い群には見られなかった。このことから習熟度によって定型表現能力の発達に対する EMI の影響は異なることが分かった。学習言語を教授言語する方針は新学習指導要領で求められていて，上記のように言語習得に対して一定の寄与が認められることから，自己点検用「英語の ALBT 点検シート」の項目として取り上げる必要があることが分かった。

一方で英語教師が「学修言語」を「教授言語」とする英語の授業における英語教師の懸念についても調査し，教授言語に関してどの程度点検シートに盛り込むべきかを検討した。Goya(2019b)の調査では,参加者は公立高校の英語教師(n=54)で，教授言語の方針に関する自由記述でのアンケート調査を行った。KH Coder を使用してクラスター分析を行った結果，8 つのクラスターが抽出され，3 つは統計学的に有意な差を示していた。

図 1. 抽出された英語の ALBT に対する 8 つの懸念

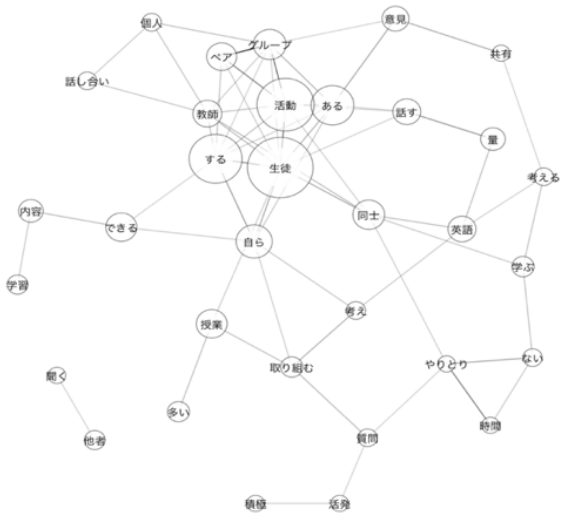


この結果からどの程度英語で授業を行っているかに関わらず,英語教師は教授言語の方針に対して懸念を抱いていることが分かった。一方で英語のみを教授言語とすべきかを検討するため，学習言語と学習者の認知的パフォーマンスの関係性を調査した。特に Goya (2020)では外国語効果を取り上げ，学習言語を用いてタスクを行うことの認知的影響を調査した。参加者は日本人大学生(n=64)で，実験では実験群を英語熟達度とワーキングメモリの値により 4 つの群に分け，それぞれに英語の「トロッコ問題」を，統制群には日本語の「トロッコ問題」に取り組んでもらった。各群の判断と反応時間の比較により低い群で熟達度とワーキングメモリについて有意な

差が確認され，外国語によるタスクは学習者の認知的処理に影響を与えることが分かった。上記の調査に加え教授言語を効果的な学びにするための教授方略の調査(Hamada & Goya, 2020)も行った。参加者は日本人英語学習者(n=37)と英語母語話者(n=30)で、実験では複数の意味の推察が可能となるような未知の複合語(n=16)の意味の推測を行った。分析の結果，日本人英語学習者はいくつかの複合語で困難さを示したが，概ね英語母語話者との同様の意味を推測することができた。上記の調査により日本人英語学習者が複合語を学習する際に必要な指導法や学習方略も自己点検用「英語の ALBT 点検シート」に含める必要があることが分かった。

これまでの調査結果に基づき，開発中の自己点検用「英語の ALBT 点検シート」に含まれるべき英語の授業に特異な「主体的・対話的で、深い学び」の概念の検討と，それら概念に対する英語教師の意識について調査を行った。まず Goya (2019a)では，公立高校の英語教師(n=53)の英語の ALBT に対する理解や意識ついて調査した。調査方法は「主体的，対話的で深い学び」に関するアンケートを行い，自由記述への回答をテキストマイニングの手法で分析した。調査の結果，主体性や対話性に対する理解は見られるが，深い学びについての理解が不十分であることが分かった。この結果から EFL 環境における「深い学び」への理論的，教育実践的な理解の深化の必要性を示した。また呉屋 (2021)では高校英語教師(n=36)の英語力，英語のみの授業実践への懸念，EMI を通じ育成している学習者の言語スキルの関連性についての調査を行った。収集された記述データは KH Coder により処理され，頻出語を抽出し，各外部変数との共起ネットワークを描画し結びつきを解釈した。描画の結果，各外部変数は様々な抽出語と共起しており，EMI をより効果的にするためは多様な要因とそれらの複雑な関係を考慮する必要があることが示唆された。

図 2. 英語の ALBT に関わる外部変数と抽出語の共起ネットワーク



これまでの様々な調査や文献調査を通じて「英語の ALBT 点検シート」に含むべき項目が明らかになってきた。そこで，すでに先行研究において関連が明らかになっていた質問項目(溝上ら，2016)と，本調査において言語化された英語の ALBT の構成概念(Goya, 2019ab)を参考に「英語の ALBT 点検シート」の構成項目を選定した。続いて呉屋・大城(2023)では，これまでの基礎調査に基づいて構成された「英語の ALBT 点検シート」の暫定版を作成し，実際の授業を対象とした調査において質問項目の信頼性や妥当性を検討した。

表 1. 英語の ALBT 授業に関わる質問項目の各指標

		M	*SD*	5*1	4*1	3*1	2*1	1*1	*r*	α*2
1	主体性 1	4.75	0.45	12	4	0	0	0	.49	.895
2	主体性 2	4.69	0.48	11	5	0	0	0	.22	.900
3	対話性 1	4.63	0.50	10	6	0	0	0	.64	.892
4	対話性 2	4.06	0.57	3	11	2	0	0	.60	.892
5	対話性 3	4.38	0.81	9	4	3	0	0	.64	.890
6	教授言語 1	4.44	0.89	10	4	1	1	0	.51	.895
7	教授言語 2	4.81	0.40	13	3	0	0	0	.23	.900
8	教授言語 3	4.56	0.81	11	4	0	1	0	.55	.893
9	授業方法 1	4.38	0.62	7	8	1	0	0	.19	.902
10	授業方法 2	4.44	0.63	8	7	1	0	0	.53	.894
11	気づき 1	3.59	0.88	3	5	7	1	0	.58	.892
12	気づき 2	4.22	0.95	8	5	2	1	0	.78	.884
13	気づき 3	3.25	0.86	1	5	7	3	0	.71	.887
14	気づき 4	3.69	0.79	2	8	5	1	0	.67	.889
15	気づき 5	4.06	0.85	6	5	5	0	0	.70	.888
16	変化 1	4.69	0.60	12	3	1	0	0	.38	.897
17	変化 2	4.25	0.77	7	6	3	0	0	.37	.898
18	変化 3	4.63	0.81	12	3	1	0	0	.78	.885
19	変化 4	4.19	0.98	9	1	6	0	0	.52	.895

備考 *1：5 は「強くそう思う」,4 は「そう思う」,3 は「どちらとも言えない」,2 は「そう思わない」,1 は「全くそう思わない」を示している。*2：その項目を削除して求めた場合の全体のクロンバックのα係数を表している。

分析の結果，点検シートの質問項目全体に高い信頼性とある程度の妥当性を確認することができたが，いくつかの質問項目でより妥当性を高めるための修正が必要であることが分かった。その結果を元に教科「英語」での AL 型授業点検シートの修正版(表 2)を作成した。

表 2. 改訂版「英語の ALBT 自己点検シート」

番号	項目	尺度				
1	学習目標、言語活動、ふりかえりは生徒が主体となった表現であった。	5	4	3	2	1
2	生徒・児童の興味、関心、意欲を引き出すような授業内容だった。	5	4	3	2	1
3	クラスメイトに自分の考えをうまく伝える方法を考える場面があった。	5	4	3	2	1
4	根拠を持ってクラスメイトに自分の意見を言う場面があった。	5	4	3	2	1
5	議論(やりとり)や発表の中で、自分の考えをはっきり示す場面があった。	5	4	3	2	1
6	英語によるコミュニケーションが必要な状況を作り出していた。	5	4	3	2	1
7	学習者のレベルや理解の状況に応じ、教師は英語と日本語を使い分けていた。	5	4	3	2	1
8	４技能５領域(読むこと・聞くこと・話すこと[発表・やりとり]・書くこと)のいくつかを通じ、教師は生徒の既知情報を引き出しつつ、新しい情報を関連づける工夫を行っていた。	5	4	3	2	1
9	４技能５領域(読むこと・聞くこと・話すこと[発表・やりとり]・書くこと)のうち、生徒は授業全体を通じ複数の技能に取り組んだ。	5	4	3	2	1
10	教師は、生徒の理解が促進されるようなフィードバック(助言や発問)を行っていた。	5	4	3	2	1
11	議論(やりとり)や発表の中で自分の考え方に間違いがあると気づく場面があった。	5	4	3	2	1
12	議論(やりとり)や発表の中で新しい物事の見方に気づく場面があった。	5	4	3	2	1
13	議論(やりとり)や発表の中で自分の考えが偏っていることに気づく場面があった。	5	4	3	2	1
14	クラスメイトの考えが自分と異なることに気づく場面があった。	5	4	3	2	1
15	クラスメイトの異なる意見を知って刺激を受ける場面があった。	5	4	3	2	1
16	議論(やりとり)や発表を通じて授業内容についての理解が深まる場面があった。	5	4	3	2	1
17	議論(やりとり)や発表の中で複数の視点から授業内容についての理解が深まる場面があった。	5	4	3	2	1
18	議論(やりとり)や発表を通じて授業内容に関する知識が増える場面があった。	5	4	3	2	1
19	議論(やりとり)や発表を通じて自分が何を考えていたのかを理解する場面があった。	5	4	3	2	1

（引用文献）

松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター（編著）(2015).『ディープ・アクティブラーニング』 勁草書房.

溝上慎一 (2014).『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』 東信堂.

溝上慎一･森朋子･紺田広明･河井亨･三保紀裕･本田周二･山田嘉徳 (2016).「Bifactor モデルによるアクティブラーニング(外化)尺度の開発」『京都大学高等教育研究』 第 22 号, 京都大学高等教育研究開発推進センター. pp.151-162.

文部科学省 (2018a).『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示)』 東山書房.

文部科学省 (2018b).『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 外国語編』 開隆堂出版.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 Hideki Goya	４．巻 30
２．論文標題 An Impact of L2 Exposures on Use of N-Grams in Academic Writing as Part of Phraseological Competence among College-Level Japanese EFL Learners	５．発行年 2021年
３．雑誌名 SCRIPSIMUS	６．最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 呉屋英樹	４．巻 49
２．論文標題 「英語による授業」に対する日本人英語教師の懸念と英語力、育成しているスキルついての探索的調査	５．発行年 2021年
３．雑誌名 KASELE Journal	６．最初と最後の頁 21-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Hideki GOYA	４．巻 65
２．論文標題 Influence of the Target Language Exposure in EFL: What do Learner Corpora Tell Us about Change of Formulaic Sequences in Academic Writing	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Ryudai Review of Euro-American Studies	６．最初と最後の頁 59-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Hamada, M. & Goya, H.	４．巻 17
２．論文標題 Considerations for Teaching Compound Words	５．発行年 2020年
３．雑誌名 SELT-Okinawa Review	６．最初と最後の頁 29-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 呉屋　英樹	4．巻 28
2．論文標題 「主体的・対話的」による深い学びとは：英語教育におけるAL型授業の認識調査から見える現状について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 言語文化研究紀要 SCRIPSIMUS	6．最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 呉屋　英樹	4．巻 16
2．論文標題 高等学校における日本人英語教師の持つ教授言語の方針への懸念	5．発行年 2019年
3．雑誌名 SELT-Okinawa Review	6．最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Hideki Goya	4．巻 64
2．論文標題 Impact of English as Medium of Instruction (EMI) in EFL: To What Extent Does Teaching in English Affect Thinking Process of EFL Learners?	5．発行年 2020年
3．雑誌名 琉球大学　欧米文化論集	6．最初と最後の頁 59-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Goya, Hideki	4．巻 27
2．論文標題 Content-Based Instruction in an EFL Writing Class: Is English Medium Instruction (EMI) Effective for Productive Development of L2 Lexes among Japanese EFL Learners?	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Scripsimus	6．最初と最後の頁 p.27 -47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Hideki Goya	4．巻 14
2．論文標題 Active Learning Based Teaching: Does Project based Learning Give any Impact on EFL Learners' Productive Knowledge of L2 Words?	5．発行年 2016年
3．雑誌名 SELT-Okinawa Review	6．最初と最後の頁 27-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Hideki Goya	4．巻 1
2．論文標題 Review of Pre-service Teacher-training Program from an Active Learning Perspective: What Needs to be Considered to Help College Students Become English Teachers?	5．発行年 2017年
3．雑誌名 琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻紀要	6．最初と最後の頁 35-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 呉屋英樹・大城大輔	4．巻 51
2．論文標題 英語のAL型授業における授業点検シート開発とその予備調査	5．発行年 2023年
3．雑誌名 KASELE Journal	6．最初と最後の頁 91-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 呉屋英樹
2．発表標題 英語による授業が及ぼす日本人英語学習者の認知処理過程への影響について
3．学会等名 沖縄英語教育学会
4．発表年 2020年～2021年

１．発表者名 大城大輔、呉屋英樹
２．発表標題 英語のAL型授業における授業点検シート開発とその予備調査
３．学会等名 九州英語教育学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 呉屋　英樹
２．発表標題 英語による授業が及ぼす日本人英語学習者の認知処理過程への影響について
３．学会等名 沖縄英語教育学会
４．発表年 2019年～2020年

１．発表者名 呉屋英樹
２．発表標題 アクティブラーニング型授業（ALBT）の考え方と実践 ～ ICTを活用したALBTの実践 ～
３．学会等名 沖縄英語教育学会
４．発表年 2017年～2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	大城　大輔 (Oshiro Daisuke)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関